

◇見学会報告◇

「我が国最北端にみるエネルギー最前線」

～稚内・幌延地区における再生可能エネルギー・原子力関連技術への取組み～

部門企画委員会 見学会担当 横田 英靖（東京ガス）

6月11日（木）、12日（金）の2日間にわたって、稚内・幌延地区における再生可能エネルギー・原子力関連技術への取組みとして、稚内市内の風力発電や太陽光発電、日本原子力研究開発機構 幌延深地層研究センター等を見学した。今回は、早々と定員の30名に達し、また、参加者の専門分野が多岐にわたる等、賑わいのある見学会であった。

第1日目は稚内空港及び JR 幌延駅で集合した後、チャーターバスで日本原子力研究開発機構 幌延深地層研究センターへ向かった。トナカイ観光牧場に隣接する場所で、地元の理解・協力の下、高レベル放射性廃棄物の地層処分技術に関する研究開発が行われている。

主に、泥岩（堆積岩）系の深地層における試験研究等を通じて地層処分の技術的な信頼性を確認している。ここでは、地下施設「東立坑」およびPR施設「ゆめ地創館」を見学した。全体説明の後、2グループに分かれ、つなぎ服に着替え「東立坑」を降下し、深度140mへ到達した。また、「ゆめ地創館」では、地上50mの展望階まで上昇し、掘削土置場も含めて研究所周辺を見渡すことができた。しかしながら、天候が悪く、期待していた利尻島等、雄大な道北の自然を見ることはできなかった。

その後、サロベツ原野経由で、稚内に向かった。途中、例年より1週間程早く開花した、エゾカンゾウの黄色の花を見つけ、つかの間の最北端を感じる事ができた。宿泊先のホテル近くの居酒屋で、恒例の懇親会を開催し、参加者全員の親睦を深めることができた。さらに、今回はプロ級の手品の披露もあり、楽しいひと時を過ごせた。

第2日目は、稚内新エネルギー研究会による、稚内公園新エネルギーサテライトでの全体概要説明からスタートした。「風のまち」稚内ならではの逆転の発想により、今や風力発電で稚内市の必要電力の70%を賄っていることや、風力発電を利用して、将来的には水素エネルギー供給を目指したい、という元気の出る話も聴くことができた。同サテライトには、風力発電を利用して燃料電池を運転する実証試験設備もあり、具体的な動きを感じた。

次に、NPO法人 風のがっこう稚内が、市民への情報発信基地として、手作りで建設したセンターハウスに立ち寄った後、北海道電力㈱のメガソーラー（最終5MW級）を見学した。「最北の稚内で太陽光発電がうまくいけば、日本全国で更に普及が進む」という考えのもと、雪による影響を軽減するためのパネル角度の工夫等、稚内ならではの試みがなされていた。そして、「快晴よりも、曇りの方が間接日射量も大きく、発電量が大きくなる。」という説明もあった。最後に、周氷河地形という特有の地形の宗谷丘陵にある、㈱ユーラスエナジー宗谷の宗谷岬ウィンドファームを見学した。雄大な大自然の中にある57基（1基1,000kW）の風車を見て、新エネルギーの時代の到来を実感した。そして、最北端の地、宗谷岬に立ち寄り、稚内空港に向かう頃には、利尻富士もうっすらと見ることができるようになった。新エネルギーにより元気を取り戻す稚内で、明るい兆しを感じた次第である。

最後に、今回の見学会では、それぞれの見学先で早い時期より日程や時間を調整していただき、また、当日は多くの方々に丁寧かつ熱心なご説明を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

